

南京事件描く 5年ごし日本初上映

日本軍が中国に侵略する過程で引き起こした南京大虐殺。この事件を描いた映画「ジョン・ラーベ〜南京のシンドラー〜」が2009年に世界で公開されて以来、5年ごしでついに日本で初上映されました(6月17日)。ドイツ人のフロリアン・ガレンベルガー監督は「何が起き、なぜ起きたのかを議論するきっかけとなつてほしい」とメッセージを寄せています。

本吉真希記者

映画の舞台は日中が全面戦争に突入り、混乱する日本軍占領前後の首都・南京。1937年12月、迫り来る日本軍に対し在留欧米人が「南京安全区国際委員会」を立ち上げ、市民が避難できる安全区を設置します。日本軍との折衝を有利にするため、日本と同盟関係にあったドイツ人のジョン・ラーベが委員長に選ばれました。ラーベは当時、ドイツ企業シーメンス社の南京支社社長で、ナチス党員でもありました。本作ではそのラーベが書き残した日記から着想を得て、南京事件における日本軍の残虐行為を大局的な視点で描いた劇映画。ドイツ・フランス・中国での日本軍の虐殺事件に詳しい井上久士・

映画「ジョン・ラーベ〜南京のシンドラー〜」



ジョン・ラーベと対峙する朝香宮鳩彦中将―映画「ジョン・ラーベ」から



出演した喜びを語る井浦新さん

不条理に耐えてたかった日本兵はたくさんいたはずだという監督の思いをのせた人物だったと語りました。

ドイツアメリカフランス、中国の名優とともに菅川照之(朝香宮鳩彦)あさかのみややすひこ||中将、杉本哲太(中島今朝吾)けさ||中将、柄本明(松井石根)いわね||大将)の名氏らが出演しています。

初上映に尽力したのが「南京・史実を守る映画祭実行委員会」です。上映権の獲得に成功し、この日を迎えました。2回の上映とも満席で900人近くが足を運びました。

来場者は「すばらしい映画だった。この映画が一般的に劇場で上映できないことが、日本の異常な現状を示している」などの感想を寄せました。

実行委員会は09年と11年にも同様的事件をテーマにした同様の映画計5本を上映する映画祭を開催。

ほとんどの映画が日本で配給会社が見つからず、商業的に公開されていません。なぜか。

南京事件は虐殺や強かんなど日本軍の蛮行を象徴する事件だからです。事実を否定する勢力の攻撃や妨害が絶えません。

98年「南京1937」の上映中、自称右翼団体が刃物でスクリーンを切り裂く事件が起きました。04年には漫画雑誌連載の「国が燃える」(本宮ひろ志作)が、虐殺描写の大幅な削除・修正に追い込まれました。

「映画祭」実行委員の一人、菅川美智代さんは「戦争の史実や戦争責任に関心のない人たちにどう広めるかを考えたとき、映画は適切な媒体です。日本は過去戦争に突きますすんだけれど、いまの政府を見て、その前後のよう。繰り返してはいけない。南京事件をなかったことにはできません」と語っています。

人道的にも許されない」とも指摘します。

不条理と日本兵

ガレンベルガー監督は「望みの日本公開にあたってビデオメッセージを寄せました。『歴史上何が起きたのか、なぜ起きたのかを知り、責任を受け』

継ぎオーブンに議論することで、南京虐殺やホロコースト(ナチス・ドイツのユダヤ人大量虐殺)のよさなことが二度と起きないようにすることが大切」と話しています。舞台あいさつに立った俳優の井浦新さんは自身の少佐役について「苦しみながら戦争の矛盾や

何がなぜ起きたのか 開かれた議論が大切

「捕虜殺害は明らかに国際法違反です。婦女暴行は日本の戦前の刑法や陸軍刑法でも犯罪行為。

上映予定＝実行委員会は8月23日、東京・文京シビックセンターで上映会を予定。今後は各地でも上映できるよう、すすめていく計画です。問い合わせ＝メール info@jijitu.com、08 0(9691)5378